

Title	佐藤君の思い出
Sub Title	
Author	蘆原, 英了(Ashihara, Eiryō)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1967
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.23, (1967. 2) ,p.331- 332
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	佐藤朔先生還暦記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00230001-0331">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00230001-0331</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

治・大正のそれである。その気性には、江戸人的な、都会的な洗練さがある、私など田舎漢とは自ら異なる肌合いであった。これはフランス文学とウマの合う肌合いである。本名を勝熊という。恐らく、熊と仇名された露西亞に勝ったから、お父さんが命名されたのがあるう。還暦記念

## 佐藤君の思い出

佐藤朔君は開成中学でも一年以上級生であったし、塾の仏文科でも一年以上であった。

ずいぶん永い馴染みである。私の中学の卒業生は、私で終りになったが、堀田周一、平野義太郎、小松義雄、佐藤朔と続いて毎年、塾の仏文科に入った。だからそういう連中を除いて、私は仏文関係ではもっとも古い馴染みである。

というから、敢て私の推察を附け加えておく。朔の他に、彼の好きな詩人の名を漢訳した洒落た筆名があった筈である。

蕪筆を弄して祝辞に代えることをお許しいただきたい。

## 蘆原英了

佐藤君は開成中学時代、天才詩人として名を知られていた。当時、鈴木三重吉の「赤い鳥」という童話雑誌があった。北原白秋選で童謡が募集されていた。毎月一編の推薦作品が掲載されたものであるが、この推薦になると、二度とは難事中の難事であった。ことに一度推薦になると、二度またその栄に浴するということは、ほとんどあり得ないことであった。ところが佐藤君は、たしか二度推薦になっ

たことを覚えてゐる。

だからわれわれの中では、佐藤君は早くから一目おかれていた。

塾の仏文科でも佐藤君は、同じくみんなに一目おかれていた。実によく勉強するのである。そして学校を休まない。私などよく怠けて、学校もよく休んだ。そして勉強にいとすんだものは佐藤君のようになり、怠けたものは私のようにになるといふ証拠を、後学の徒に示した。

当時の仏文科の先生は広瀬哲士、後藤末雄の両先生であったが、広瀬先生が「フランス文学」といふ雑誌を創刊された、仏文科の生徒たちがその編集の手伝いをしたことは、いまだに忘れられない。その編集は佐藤君が主としてやっ

ていたようであり、佐藤君は本名のほかに「鳥巢公」といふ筆名で、盛んに新しい文学の紹介につとめていた。ジャン・コクトオなどには特に強い興味を持っていて、コクトオは鳥巢公によつて、よく知らされたといつてもよからう。

今日では驚くことではないが、フランスの新しいものを専門的に紹介したのは、多分、佐藤君がはじめてである。サルトルも佐藤君が一番早く紹介した。

塾の仏文科が、他の大学の仏文科に、例えば東大の仏文科に匹敵する秀才をだしたのは、佐藤君が最初であったことも、今日の人は知らないであらう。

佐藤君のことを書けば、きりががない。